

韋 編

いへん

愛知大学図書館報

No. 30

「韋編」……文字を書いた竹や木の札を、
なめし皮の紐でとじた上古の書物。

情報の集散拠点としての図書館

図書館長 南 龍 久

この度、私は愛知大学図書館長に就任しました。この分野の知識・経験に乏しい私が、図書館の運営の重責を担えるかどうか心許ないかぎりですが、今後は、図書館員をはじめ皆様のご指導とご協力をえてこの責を果たさなければと思っています。

さて、教育・研究機関としての図書館は、今、どのような役割を担うところとなっているのでしょうか。このことを私なりに考え、併せて図書館の最近の新たな取り組みを紹介して、多くの方々に多大の関心を寄せていただきたいと思います。

図書館規程をみるまでもなく、図書館の「目的」は研究と教育に必要な図書その他の資料を収集・管理し、学生、教職員および館長が許可した者の利用に供することにあります。これを基に考えますと、第一に重要なことは、図書館はこれまで人類が営々と蓄積してきた知や情報を収集・管理し、これを多くの利用者に提供するという任務を果たすところ、つまりは情報の集散拠点であるということです。この点は、今日のように高度IT化社会になってもその重要性は変わりません。むしろ、そのノウハウやシステムを生かして、例えば図書・資料の内容のデータベース化、CD-ROMなどの形態をとって組



織的かつ効率的に蓄積された膨大な情報を、多様化している利用者に向けて系統的に提供しなければなりません。今日の図書館には、その意味で図書・資料の貸出を行うという図書館本来の役割の充実が求められています。

また、ここに利用者というばあい、本学の学生、教職員はもとより、今や一般社会人にまで広がっています。一般社会の人々のニーズに応じた知や情報の提供を、IT化に適合した様々なサービス機能によって実施していくという方向を積極的に探求するのは、図書館の今日的な使命の一つであります。本学図書

館は、地域社会に開かれた図書館を目指し、最近、新たなサービスをもって卒業生や一般社会人の利用の可能性を広げてきています。こうして情報の集散拠点としての図書館の役割は、今、確実に学内外に向かって浸透しつつあるといえます。

ところで、このように図書館を情報の集散拠点と見做すとなれば、次に出てくる第二に重要な問題は、膨大かつ継続的に収集される知や情報をどのような方法でそれぞれの利用者に効率的に発信し、提供するかということです。これには、前述のようにIT化に適合するという観点が不可欠であり、それとの関わりでいえば図書館は新たな機能を様々なに拡

充し実施に移してきており、実はこの点が最近の顕著な特色となっているのです。図書館の最新の取組みについては、既に学内の他の媒体を通じてお知らせしてきていますが、ここに改めて最近の新たなサービス機能のいくつかを紹介して、蓄積された知や情報を積極的に活用していただく上での一助としたいと思います。

大きな取組みは、図書館新システム導入によるサービス向上です。これは愛知大学図書館（豊橋・名古屋・車道）が今年10月より準備し、この度その新サービスを開始したものです。これには、①学生・教員ともユーザIDとパスワードを登録して、OPAC検索画面から蔵書検索・新着圖書の照会はもとより、貸出中圖書に予約を付けたり、自分の貸出中圖書や予約圖書の照会ができるようになったこと、②教員はその他購入申込・発注状況の照会ができるようになったこと、③OPAC上で、著者一覧やシリーズ一覧の情報が簡単に見られるようになったこと、④中国語の簡体字や韓国語のハングル文字がOPAC上で表示できるようになったこと、があげられます。なお、同システムによる他のサービス機能は、今後経過をみて追加していくことになります。

さらに、上記新システム導入に先立ち、既に今年4月より、いくつかの点で利用者へのサービス向上に努めてきています。開館日の増加、車道図書館開館時間の延長、卒業生・一般社会人への図書貸出・外部データベースの検索の可能性の拡充など様々です。また、名古屋図書館での新たな試みとして「学部別・新入生向け図書コーナー」を新設するか、今後は図書館ガイダンスと入門ゼミ・専門ゼミとの連携、とくに教員の講義との連携に積極的に取り組めるよう検討しているところ です。

以上、図書館における最近の種々の新サービス機能を紹介してきましたが、ここで将来を見据えて、いふなれば図書館の担う現代的

な役割の質的高次化を指向するという観点にもとづくとき、どうしても軽視することのできない重要な課題があります。それは、図書館のレファレンス・サービスの充実という問題です。

利用者各人の関心事や課題に応じて相談をうけアドバイスするという図書館のレファレンス・サービスについては、公共図書館ならどこでも実施しています。むろん、大学は教育・研究機関ですから、探求すべきレファレンス業務の性質や方法について公共図書館のばあいと自ずから異なってくると思いますが、基本的方向としてはこれからの大学図書館にとってこの機能の充実が賦活剤となり、戦略的意義も大きいといえます。それだけに、本学図書館ではレファレンス担当者の増員が望まれ、このことが焦眉の課題の一つであると思われます。

このように図書館の将来的可能性を考えるとき、もう一点無視できないのは三校舎に置かれている図書館の相互連携・協力体制の問題です。三つの図書館はそれぞれ異なる学部教育・研究分野などを基盤としている以上、それぞれのもつ独自色を生かすのは当然であり、それを前提として三拠点が連携・協力の体制をどう維持し強化していくかということです。とくに図書・資料の貸出業務を超えたレファレンス業務ともなると、一層のネットワーク化を通じての連携・協力体制の構築が必須となるでしょう。三校舎間の連携・協力の必要性は、愛知大学のどの領域においても求められますが、とりわけ図書館の効果的な運営にとってはこれまた重要な戦略的意義を有していると考えます。

図書館は蓄積された知や情報の集散拠点であると述べてきました。本学のばあい、この種の拠点を、三校舎の連携・協力体制を通じてどう発展させるかが重要な課題です。学生、教職員、卒業生および一般社会の人々から有益な知恵と情報が発信されるよう切望します。